

境界線の思考

フィクションとしての二項対立

桑田 光平

序

オリヴィエ・ビュルジュランによって編集された『青は今年の流行り¹⁾』(2001)はバルトのモードに関する論文あるいはインタビューを集めたものであるが、そこには当然、大著である『モードの体系』(1966)は含まれていない。それでも、この「最初の記号学的音階練習²⁾」が書かれるまでの経緯、その目的や射程、さらにはバルトがなぜモードという現象に関心を持ったのかまで我々はこの論集から伺い知ることができる——ついでに言えばこの論集には、「再び身体を」という1978年に公刊されたバルトへのインタビューとビュルジュラン自身による「バルトと衣服」という論文が付いている。『神話作用』(1957)、とりわけそのあとがきである「今日における神話」において、言語活動以外の記号体系を分析することの可能性を感じていたバルトは、食べ物、身振り、行動、会話などと同様にコミュニケーションの対象の一つであるモードを選択し、記号学を用いた体系的分析である「衣服の社会学」を企図していた。ところがモードというのは幾つかの異なる体系(「衣服の生産技術、(写真の)イメージ、書かれた言葉³⁾」=実際の衣服、モード写真、記事)が混交したものであり、それを一つの運動として研究することに困難を感じたバルトは、指導者であったレヴィ=ストロースと議論の末、書かれたモードのみを研究対象として選択することになる。この当時のバルトの関心事は「様々な観念やテーマよりも、それらを社会がどのようなやり方でと

¹⁾ Roland Barthes, *Le Bleu est à la mode cette année et autres articles suivis de « Barthes et le vêtement »* par Olivier Burgelin, Editions de l'Institut français de la mode, 2001.

²⁾ Louis-Jean Calvet, *Roland Barthes 1915-1980*, Flammarion, 1990, pp.198-199. バルトは友人である言語学者グレマスへの献辞の中で『モードの体系』をそのように規定した。

³⁾ 以下、バルトからの引用は全て Roland Barthes, *Œuvres complètes*, t.I, t.II, t.III, Seuil, 1993, 1994, 1995.を用い、作品名、初版刊行年、全集の巻数、ページ数の順で記すこととする。初版刊行年は全て全集による分類に従った。「Sur le Système de la mode et l'analyse structurale des récits», 1967, *O.C.*, t.II, p.453.

りこみ、意味を持つ一定数の体系の実質に変えていくのか⁴」ということであり、さらに言えば、こうした記号学を用いたイデオロギー分析・批判はイデオロギーの内容ではなくその形式を扱うことを大きな目的としていた。

意味に関する学問あるいは議論としての記号学の可能性の一つは、まさにそれが形式において、つまり一般的にイデオロギーが探求されることがもっとも少ない領域において、イデオロギーを浮き彫りにすることを可能にする分析手段を与えてくれることにある。内容のイデオロギー的範囲というのは極めて以前から視野に入っていることであるが、形式のイデオロギー的内容はこういってよければおそらく、今世紀の業績の偉大な可能性の一つである⁵。

このような『神話作用』の流れを汲む記号学的イデオロギー分析によって「書かれたモード」の形式あるいは体系を扱おうとしたバルトは、必然的に構造分析の道を歩むこととなる（「そしてこの体系は形式的なものであるので、私は一連の構造分析に携わることになりました⁶」）。

こうしてバルトは記号学と構造分析を方法論的拠り所として、文学やモードをはじめさまざまな記号体系の分析、（彼の本のタイトルを借りれば）「記号学の冒険」へと乗り出すのだが、当然その前に、彼は方法としての記号学や構造分析の基礎体系を築き上げなくてはならなかった。前者は「記号学の原理」（1964）、後者は「物語の構造分析序説」（1966）という形で結実することになる。『モードの体系』は「記号学の原理」で提出された分析概念をモードという特定の文化的対象に適応した「方法の書⁷」である。つまり、この本は『神話作用』でのプチュブル・イデオロギー批判の延長線上で企図されたものではあるが、それと同時に構造分析という方法論の確立を目指していたのだ。したがってビュルジュランが言うように、バルトがモードという対象を選んだのは、モードの軽薄さが逆に確固とした方法論をきちんと浮かび上がらせるからである。

『神話作用』の対象である政治的事件や社会的事象と比較して、軽薄で取るに足らないものとされているモードなる対象に関して取り上げるべき点がもう一つある。見たところバルトは異議申し立ての重要性を疑ってはいない。なぜなら、彼は方法論の証明を行いたかったと主張しているからだ。その方法論の証

⁴ *Essais critiques*, 1964, O.C., t.I, p.1283.

⁵ « *Structuralisme et sémiologie* », 1968, O.C., t.II, p.526.

⁶ *Essais critiques*, 1964, O.C., t.I, p.1283.

⁷ *Système de la mode*, 1967, O.C., t.I, p.131.

明のためには、対象が取るに足りないものであることが決め手となる。拠り所
にしている方法を浮かび上がらせてくれるのだから⁸。

方法論の証明としての『モードの体系』はその厚さも相まって、厳格で無味
乾燥とした書物の印象を我々に与えることになる。

ビュルジュランによって編集された本を端緒としてバルトの 60 年代の記
号学的・構造主義的仕事を概観してきたが、周知のようにこの時代のバルト
はあまり評判が良くない。それは例えばジョルジュ・ムーナンのようなソシ
ユールの正統的後継者を自認する言語学者によるバルトの記号学に対する無
理解への非難にとどまらず⁹、70 年代のバルト、すなわち快樂主義者、漂流
する人といった現代のリベルタンとしてのバルトと比較して、その科学主義
の味わいのなさや厳格さ、快樂や欲望の欠如が非難の対象となることが多い。
あたかも 70 年代の欲望の人バルトが提唱したテキストの快樂は 60 年代のテ
キストには見出すことが不可能であるかのように。

さらにこうした非難が容易になされるのは、バルト本人によるこの時期の
活動に対するコメントの口調が原因だといえる。すでに 1971 年のインタビュ
ーで、バルトは自分が数年前に構想していた言語学に依拠した文学の科学の
時期を「一種の科学への熱狂」(une sorte de délire scientifique) の時期とし、
醒めてしまった夢のような過去のものとして回顧している。

私は当時、記号学という科学に没入する可能性を熱心に信じていました。私は
科学性の(幸福に満ちた)夢を通過したのです(『モードの体系』と『記号学の
原理』はその残滓です)¹⁰。

こうしたバルト本人のお墨付きを後ろ盾に、60 年代のテキストの擬似科学性
のみをとりあげて非難する者は、60 年代と 70 年代の間にバルト自身が「前
言取り消し」(palinodie) を置いたとでも錯覚しているのかもしれない。場合
によっては、バルトにとっての 60 年代は「過ちの時期」だとまで考えられて
いるのが現状だ。

今日、バルトのこの部分の仕事はしばしば残りの部分(とりわけ以後の仕事)
と分けられ、時には非難され、その当時の理論的行き過ぎと結びついた科学主

⁸ Olivier Burgelin, « Barthes et le vêtement » in Roland Barthes, *Le bleu est à la mode cette année*, Editions de l'Institut français de la mode, 2001, p.193.

⁹ Voir Georges Mounin, *Introduction à la sémiologie*, Minuit, 1970, pp.189-198.

¹⁰ « Réponses », 1971, *O.C.*, t.II, p.1314.

義の過ちの時期であつたに過ぎないと考えられている¹¹。

この論考の目的は、バルトの60年代の科学的な仕事を歴史の中に位置づけてそれを再評価することでも、60年代も70年代もバルトは常に変わらず一貫していたなどと主張することでもなく、ただ、彼のいわゆる擬似科学的で均質とされるテキストの中に「意味のざわめき¹²」を聞き取ることである。文化やテキストを前にして意味がふるえ、産出されるその瞬間に立ち会い、そのざわめきに形を与えるというバルト的営みを、我々はバルト自身のテキスト——科学的とみなされているものですら——においても行なうことができるはずだ。そして、そこから新たなバルト像がおぼろげながら浮かび上がってくることを期待している。

I. 二人のバルト

アントワーヌ・コンパニオンは『文芸の第三共和政』（1983）の冒頭に「二人のバルト」と題する序文を載せ、そこでヌーヴェル・クリティックが二人のバルト、構造分析のバルトとテキストの快樂のバルト、体系主義者のバルトと主観主義者のバルト、厳格なバルトとしなやかなバルト、禁欲主義者バルトと快樂主義者バルトを有していることを告げ、さらには、そうしたヌーヴェル・クリティックの二重性が、ブリュンチエールの教条的科学主義とファゲ、ルメートル、フランスの印象批評という二重性を持つ旧・旧批評の反復であることを明らかにする。こうした旧・旧批評に異議を申し立てることでランソン流の文学史は成立したのだが、ヌーヴェル・クリティックは自らの歴史に対する関係に盲目であつたために、ランソンに異議を申し立てることで、旧・旧批評が歩んだ運命をそのまま反復してしまったのだとコンパニオンは告げ、あの二人のバルトというのは、歴史＝文学史に対する否定的立場において結局は一つであると述べるに至る。こうして最終的に二つのバルト像を一つに解消してしまうのではあるが、それでもコンパニオンがそのような平凡な区分を基本的に受け入れていることは間違いない。

逆説的にも——少なくとも、奇妙にもとは言えよう——、60年代・70年代の文学理論——いわゆる形式的、体系的で厳格なアプローチ——は、より個人的で、

¹¹ Marc Buffat, « L'Aventure sémiologique » in *Sur Barthes : Revue des Sciences Humaines*, n°268, 2002, p.27.

¹² *Essais critiques*, 1964, O.C., t.I, p.1332.

主観的な、ほとんど内面的といってもよい批評で薄められた。ちょうどワインを水で、あるいは水をワインで薄めるのと同じように。[...] 例えば、頑なな人としなやかな人、快樂主義者とメソジスト教徒といった二人のバルトが存在すると（敵対心を持ってが暗黙の同意からか）しばしば強調されてきたのだ¹³。

この種の区分を意識的にか無意識的にか行い、構造主義者バルトを快樂主義者バルトよりも下位に置く論者を挙げるのはさほど難しいことではない。典型的な例としてスティーヴン・アンガーの「物語の構造分析序説」に対するコメントを引用してみよう。

この論文にはいくらかしっくりこない感じを覚えた。というのも、データを取り入れ、処理し、蓄積するための無限の能力を備えた巨大なコンピューター端末機のイメージを喚起させるような切り替え、分配、統合などの諸行為のプロセスとして読解という作業を概念化するのが適当だという気には私はどうしてもなれないのだ¹⁴。

アンガーの本は非常に良くできており、常に転位するバルトの変化と相違とを段階的に追っていきながら、それぞれの著作にアプローチするというもので、アメリカの読者に対して固定したバルト像を植え付けまいとする配慮が伺える。この好著においてバルトの知的活動は二つではなく、大雑把に三つ——サルトルの影響を受けた 50 年代の初期バルト、構造分析を行い文学の科学を目論む 60 年代の理論家バルト、70 年代のロマネスクへと向かう欲望の人バルト——に分割されており、理論からロマネスクへと向かう過程が一つの大きな主題となっている。しかし、この本の大部分は 70 年代のバルトに割かれており、60 年代のバルトの活動は 9 章中わずかに 1 章を充てられたのみで、それ以外で時折言及されたとしても引用に見られるような否定的なトーンで語られる場合が多い。

クロード・ブレモンとトマス・バヴェルもまた、明確に二つのバルト像というイメージを持っているわけではないが、60 年代のバルトの活動を厳格で味気のないものとみなし、1970 年に刊行された『S/Z』をいわば転換の書としながら、この書から見出せるその後の作家バルトの萌芽と、未だに残る過度に理論的な構造主義者バルトとの混在を指摘している。まず、大文字の歴史や文学が語られていた『零度のエクリチュール』（1953）や現実社会や歴史

¹³ Antoine Compagnon, *La Troisième République des lettres*, Seuil, 1983, p.6.

¹⁴ Steven Unger, *Roland Barthes : The Professor of Desire*, University of Nebraska Press, 1983, p.117.

と密接な関係を持っていた『神話作用』から、歴史を捨象し理論的前衛の道を進んでいくバルトの姿が描かれる。彼らによれば、記号学的試みを極限まで進めていった結果、「才気に満ちたエッセイストは厳格な学者となり、自分の文体を捨て去って自らの思想を統御した¹⁵」のだ。こうして文体を欠いた「批評的エクリチュールの零度¹⁶」を発見したバルトは、世界に様々な形で遍在する物語を統御する唯一普遍的なシステムというユートピックなモデルを夢想する。そして、普遍的システムという夢想を横断したバルトが「現実効果」(1968)の最後で持ち出した「記号の解体¹⁷」(la désintégration du signe)を「ポスト構造主義」への移行の一つの特徴と見て取るブレモンとパヴェルは、構造主義や記号学の科学的活動が「バルトの経歴において一時的な異常に過ぎないことがわかった¹⁸」と言い放つ。また、これまで見てきたアンガーやブレモン、パヴェルたちのように構造主義者バルトをはっきりと非難しなくとも、フィリップ・ロジェのように単にその時期のバルトについてほとんど触れず、沈黙という方法で否定的評価を示すやり方もあるだろう¹⁹。

確かに60年代のバルトの過度に理論的とも見える仕事には、歴史の捨象や文学と現実との無関係性などいくつかの大きな問題ををはらんでおり²⁰、それと比較して理論的厳格さを捨てたかに見える70年代の仕事は理論家ではなく作家として自由にエクリチュールを紡ぎだしており、理論を捨てることで60年代の理論的欠点も捨て去られたかのような印象を与える。こうした二つのバルト、60年代の科学の人バルトとそれ以降の快樂の人バルト、理論家のバルトと作家のバルトという二項対立はバルトの活動を通時的に見た場合に生じてくるのだが、例えば60年代の理論的前衛と呼ばれたときのテキストの中にも二つのバルト像を同時に認めることは可能である。

バルトの初期の作品には、彼の常に変わらない二つの関心事が見受けられる。一つ目は「世界に対する倫理的主張」に属するものであり、もう一つは、理解するのはとても容易だが表現するには難しい。それは形式、形式的なものそしてとりわけ形式主義なのであり、そうした用語には場合によっては軽蔑的なコノテーションが与えられている。まさにこのことが問題なのだ。そこから初期

¹⁵ Claude Bremond et Thomas Pavel, *De Barthes à Balzac : fictions d'un critique, critiques d'une fiction*, Albin Michel, 1998, p.43.

¹⁶ *Ibid.*, p.44.

¹⁷ « L'effet de réel », 1968, *O.C.*, t.II, p.484.

¹⁸ Claude Bremond et Thomas Pavel, *op.cit.*, p.47.

¹⁹ Voir Philippe Roger, *Roland Barthes, roman*, Grasset, coll. « Figures », 1986.

²⁰ こうしたバルトの文学理論がもたらす問題に関しては Antoine Compagnon, *Le Démon de la théorie*, Seuil, coll. « Essais », 1998 のとりわけ第3章が詳しい。

バルトの語のレベルにおける矛盾、あるいは少なくとも表現の首尾一貫性を保持することの難しさが生じてくる。この頃のバルトは「形式的」研究を望んでいると同時に、形式主義がもつ危険な障害を暴き出しているのだ²¹。

ビュルジュランが見る二人のバルトのうち、後者はすでにここでも繰り返して述べられている構造、文法、システムへの科学的関心をもったバルトである。それに対して前者は、『神話作用』の作者、すなわち「記号のシステムに結びついた社会的イデオロギー的悪²²」を告発するバルトである。モードという現象も決して自然に存在しているものではなく、「ブルジョワ社会が常に与える記号であり、そうした記号は自然や理性によって正当化されたものとして与えられている²³」。このような自然なもののみなされている記号体系を「理解可能なもの」として眼前に形式化することが『モードの体系』の目的である。ここで注意すべきなのは、イデオロギー告発そのものよりも、それを行う創造的な方法であり、それこそがバルトによれば「構造主義的活動」なのだ。『エッセ・クリティック』(1964)におさめられた「構造主義的活動」という論文においてバルトは、

あらゆる構造主義的活動のねらいは、それが内省的なものであれ詩的なものであれ、ある「対象」を再構成することである。しかも、この対象の作用の様々な規則（「諸機能」）が、この再構成において明確になるようなやり方で。[...] 模倣された対象は、目に見えなかった何ものか、あるいはこう言ってよければ、自然な対象においては理解不可能であった何ものかを出現させるのだ。[...] 新しい何かが生み出されるのだが、この新しいものこそ一般性をもった理解可能なものに他ならない²⁴。

と述べており、これに従えば、云々のイデオロギーが社会には隠されているということを単に分析するのではなく、そうしたイデオロギーがいかにして隠された形で産出されているのかを明らかにすることが構造主義的活動なのだ。つまり、社会において意味や記号がいかにして生み出されるのかというシステムの働きそのものを名づけ、我々読者に理解できる形で顕在化するという創造的側面がここで強調されている。「顕在化」という言葉を用いたが、それはある体系が意味を産出するという事実を発見することではなく、そう

²¹ Olivier Burgelin, *op.cit.*, p.191.

²² « Entretien autour d'un poème scientifique », 1967, *O.C.*, t.II, p.472.

²³ *Loc.cit.*

²⁴ *Essais critiques*, 1964, *O.C.*, t.I, p.1329.

した意味産出の現場を新たな形で作り出して我々に提示することに他ならない。一言で言ってしまうと、60年代のバルトが目指したのは分析することがそのまま何かを創造することとなるような活動だと言ってしまうだろう。そこでは理論家バルトと作家バルトとがその境界線をはっきりとは定められないような形で共存している。

創造に関してもう少し付け加えておこう。すでに見たように、バルトがモードという対象を選んだ理由は、モードが移ろいやすく、ほとんど「無」に近い軽薄な現象であるために、証明すべき科学的方法論が逆に浮彫りになるからであったが、同時にそれは「無」を用いての創造というマラルメ的な企図からでもあった。

マラルメ自身によって執筆され編集された雑誌『最新流行』は結局のところ、無、何でも無いもの、マラルメがいうところの飾り物といった主題の、彼自身のやり方による一種の熱心な変奏であった²⁵。

マラルメによる「無」の変奏に憧れる「バルトは、モードに関する自分の研究が読者の目に、〈無を用いて、あるいは極めてわずかなものを用いて、ある知的対象〉を創り出す一貫した〈詩的計画〉としても映りうることを望んでいた²⁶」のだ。『モードの体系』において、分析的側面よりもむしろ創造的側面が強く現れているのは、間違いなく第2部「レトリックの体系」であろう。第1部では、ソシュール、イエルクスレウ、マルティネらの言語学的成果であるシニフィアン／シニフィエ、パラディグム／シンタグム、デノテーション／コノテーションなどの概念装置を活用し、書かれた衣服のコードをめぐって、その単位、母型、変形の種類、組み合わせなどが事細かに分析されていく。ここに理論の人バルトを見るのは難しくない。しかし第2部でバルトが問題とするのは、モードの言説のレトリックである。この本においてレトリックは、コミュニケーションの有効性を高めるための技術としてコノテーションと同義とされている（「レトリックの体系とともに、我々はコノテーション全般に手をつけることになる²⁷」）。コノテーションを問題にするということは、モードの言説とそれを生み出しかつ受容する世界＝社会との関係を考えるということであり、分析主体であるバルトもまたこの社会の一員

²⁵ « Entretien autour d'un poème scientifique », 1967, O.C., t.II, p.473.

²⁶ Olivier Burgelin, *op.cit.*, p.193. 傍点論者。

²⁷ *Système de la mode*, 1967, O.C., t.II, p.317.

である以上、無傷でいることはできない²⁸。

それ故、レトリックのシニフィエがひどく不明確であることは、実は世界へ向かって開かれているという²⁹ことなのだ。この最後のシニフィエによってモードは自らの体系の極限に到達する。そこで、この体系は世界全体に触れながら崩壊するのだ。レトリックのレベルへ至ると、分析はこの運動の中に引き込まれ、分析の際の形式に関する前提を放棄しなくてはならなくなる²⁹。

ここにきてバルトは、第1部でみせたような言語学を頼りとした形式主義的アプローチからやや身を引き、モードの言説がいかなる効果を及ぼすかを「世界に対する倫理的主張」として考察しなくてはならなくなる。そこにはもはや最終的な根拠となる客観的科学は無いが、それでも分析者は、モードの体系の使用者たちから距離をとり、なるべく客観的に観察することでできるだけ客観的たろうとする（「分析者は客観的でありながら同時にアンガジェしてはならない³⁰」）。こうして、分析者と世界との主観的關係がいくらか反映される形でモードの言説はできるだけ客観的に解釈されていくことになる。モードの言説が誘惑する複数の人格（「厳格な女性、それはあなた、そして、穏やかな女性、それもあなた」）に対して読者は、自己喪失に陥らない程度に「私は誰か？」という重大な問いと戯れているとか³¹、モードの女性は悪を知らない常に幸福な人として描かれ、それ故にそれはあたかも時間性

²⁸ ポール・ド・マンは1972年に書かれた「ロラン・バルトと構造主義の限界」において『神話作用』での記号学によるイデオロギー批判を高く評価しつつも、「記号学の脱神話化の力は、知の源泉であると同時にある種の危険性をも包含している。他人を犠牲にした上でなお首尾一貫して正しくあろうとするならば、自分に対してもある種の危険が必ず伴う」として、分析主体が拠り所とする記号学の科学性・客観性をもつイデオロギー性を指摘している。つまり分析方法である記号学とそれをを用いる分析主体が全くの純真無傷な状態であたかも社会の外から社会のイデオロギーを分析しているかのような図式に対してド・マンは本質的な批判を行なったわけである。Paul de Man, « Roland Barthes and the Limits of Structuralism » in *Romanticism and Contemporary Criticism ; The Gauss Seminar and Other Papers*, The Johns Hopkins University Press, 1993. pp.170-171. しかし『モードの体系』のレトリック分析において、バルトはこのことを十分に意識しており、『モードの体系』の最後は次のように締めくくられることになる：「記号学者は、自分が世界を名づけ、世界を理解したその用語それ自体によって、そのまま自分の未来の死を表現することになるのだ。」（*Système de la mode*, 1967, O.C., t.II, p.370.）

²⁹ *Système de la mode*, 1967, O.C., t.II, p.323. 傍点論者。

³⁰ *Loc.cit.*

³¹ *Ibid.*, pp.340-342.

の無い小説の断片のようだ³²というバルトの文章には、もはや第1部で見られた客観的・分析的エクリチュールはやや後退し、彼はただ幾つかの首尾一貫した——バルトはレトリック＝コノテーションに関しては客観的な証明はできないので、「首尾一貫性」(cohérence)がある程度の客観性の基準であると述べている³³——主観的な小さな物語を創造しているかのようである。

マルク・ビュファもまた、我々とは若干異なる道筋を通りながらも、バルトのエクリチュールの特色を主観性と客観性の和解だと考えている。ビュファは、『モードの体系』の中のモードの言説のレトリック分析におけるメタ言語と記述言語という二項対立の消滅、『ロラン・バルトによるロラン・バルト』(1975)でのjeとilの併用、『S/Z』における生産活動としての読書などを例に挙げながら、バルトが常に主観性と客観性とを和解させようとしていたと考え、この和解が可能になるのはバルトにとって文学の条件であったコノテーションにおいてだと結論づけている³⁴。

70年代の自由で快樂主義的バルトと比較して厳格で科学的で理論的と非難されてきた60年代のバルトの著作の中に、すでに分析的・理論家的・客観的であるバルトと創造的・作家的・主観的であるバルトの二人が共存していることをこれまで見てきた。この二人のバルトはテキストの中で決して予定調和的に解消されることなく、せめぎあう形でともに手を取りながらバルト的エクリチュールを構成しているといえる。こうした共存するが相容れがたい二人のバルトのせめぎあいの例をもう一つここで取り上げてみたい。そのために我々はミシェル・ビュトールのバルト論「魅惑する女」(1968)の中のある指摘を導きの糸とする。ビュトールはバルトが『エッセ・クリティック』の中で「独断的」(dogmatique)という言葉を用いて全く相反する意見を述べたことに注目する³⁵。バルトは「批評とは何か？」(1963年)において「独断的であるような偉大な作品はない」と述べているが、同年の「文学と記号作用」においては「作品とは常に独断的だ」と述べている。こうした矛盾からビュトールはバルトの思考の特質を洗い出していく。ビュトールはまずこう

³² *Ibid.*, p.345.

³³ *Ibid.*, pp.323-324.

³⁴ Marc Buffat, *op.cit.*, pp.37-39.

³⁵ Michel Butor, « La Fascinatrice » in *Répertoire IV*, Minuit, 1974, pp.374-376. ビュトールのこの論文について少し付け加えると、彼は『モードの体系』において、バルトが若い男の子に禁じられた三つの言語——「性に関する言語」、「学問的言語」、「女性の言語」——を混ぜて用いていることを指摘している。バルトが理論的著作をたてつけに発表していた1968年という段階でこのようなバルトの複数言語による遊戯を指摘したのはビュトールの慧眼である。

したひどい矛盾をやったのけるバルト自身の作品は独断的ではないとするが、同時に、双方のテキストにおけるバルトの口調に注目しそれを独断的だとみなす。それでも、作品の最後で必ず「おそらく」や「見方によれば」といった不確定性を示す表現や動詞の条件法などを挿入することで、バルトは常に自分のディスクールを独断的なものではなく、一つの提案とすることに成功しているとビュートルは言う。ここで我々が注目するのは、バルトの発言の文脈である。バルトが「作品は常に独断的だ」と言ったとき、実は問題となっているのは言語活動なのだ。作品が独断的になるのは、言語活動が断定的になってしまうからであり、作者の「善意」はそこにはみあたらない。なぜなら、「善意」を伝えようとすればたちまち言語はその「善意」を誇示するように振る舞うからだ。言語活動とは常に威嚇的で「絶対にテロリスト的な性格³⁶」を持つものであって、こうした言語活動の威嚇性あるいは断定性への嫌悪は後年のバルトにおいても保持されることになる³⁷。逆に「独断的であるような偉大な作品はない」という時、問題となっているのは文学作品である。バルトにとって文学作品とは「宙吊りにされた意味³⁸」すなわち常に意味をはぐらかす記号体系なのである。それゆえに文学作品にある固定した真理や答えを期待しても、文学作品は決してそれには答えずに絶えず解釈を誘発し続けるだけなのだ。ここで示されているのは言語活動の二つの側面である。前者は断定的で意味を一つに固定しようとするあまり独断的に映るのだが、こうした性質がなければ我々は科学的・客観的・批判的思考ができない。後者は逆に文学的創造のための戯れの言語活動であるといえる。バルトは常にこうした二つの言語活動の境界線上にいたのであり、それ故にビュートルが指摘するような矛盾が容易に見つかるのだ。

結局、ロラン・バルトとは二つの主体あるいは二つの言語活動の境界線の上で決して定まらず揺らぎ続ける思考だと言えるだろう。

II. 始動装置としての二項対立

二人の異なるバルトが共存していたということは、観点を変えてみると、バルトが二つの主体あるいは二つの言語活動に引き裂かれていたとも言える

³⁶ *Essais critiques*, 1964, O.C., t.I, p.1375.

³⁷ *Voir Leçon*, 1978, O.C., t.III, pp.799-816. バルトは1977年のコレージュ・ド・フランス教授就任講演で「言語はファシスト的である」と述べた。

³⁸ *Essais critiques*, 1964, O.C., t.I, p.1360.

わけであり、こうした状況は終生続いていたと言えるだろう。晩年の『明るい部屋』（1980）においてバルトは以下のように告白している。

写真について書きたいという欲望によって明らかになったこのジレンマは、私がいつも味わってきた一種の居心地の悪さを反映するものだ。それは主体が二種類の言語活動、つまり一つは表現的言語活動、もう一つは批評的言語活動の板ばさみになることからくる居心地の悪さだ³⁹。

常にこうした二つの主体、二つの言語活動の境界線において、いくらか居心地の悪さを感じながらも思考し書き続けてきたバルトに最も適した思考法は二項対立だった。処女作『零度のエクリチュール』（1953）から『明るい部屋』に至るまで、ともすれば単純で時に危険だと思われる二項対立という概念装置を利用し続けたバルトは、二項対立的思考が時代の趨勢ではなくなりつつあった 70 年代半ばになっても何のためらいも無く自らの二項対立 (le binarisme) への愛を語っている。

二項対立は彼にとって真に愛の対象だった。この思考法が開発しつくされることなど決してありえないと彼には思われた。たった一つの差異によってあらゆる言えるということが、彼の中に一種の喜びを、絶え間ない驚きを引き起こすのだ。[...] 二項対立を手放してしまった記号学などもはや彼にはほとんど関係ない⁴⁰。

回顧的口調ではあるが、それでも自分が二項対立を手放すつもりがないという意思がここには伺える。すでに別のところで述べたが⁴¹、バルトには同時に二項対立的な思考法に対する嫌悪がある。例えば「男らしい／男らしくない」という二項対立は優劣が社会によってあたかも自然なものとして既に規定されている上にそのいずれかが社会によって押し付けられるが故に強制であるし、「左利き／右利き」のような二項対立は、右利きが大多数の社会においては、左利きの者にとって暴力的な区分であるといえる。バルト的「中性」(le neutre) はまさしくこうした二項対立が不可避的に孕む暴力をなしくずしにするようなユートピックな概念であるといえる。さて、二項対立への愛と

³⁹ *La Chambre claire*, 1980, O.C., t.III, p.1114.

⁴⁰ *Roland Barthes par Roland Barthes*, 1975, O.C., t.III, p.134.

⁴¹ 拙論「ロラン・バルトにおける〈道徳性〉の概念——友愛としてのエクリチュール——」、『仏語仏文学研究』第 24 号、東京大学仏語仏文学研究会、2001 年、pp.81-84 参照。

二項対立への嫌悪というバルト的矛盾にまたしても我々は立ち合っているのだが、ここではマルク・ビュファによるバルトの二項対立に関する考察を参照してみよう。

ビュファはバルト的二項対立——実際には「対照」(antithèse)という言葉が使用されている——の特徴を「パラディグム性」(paradigmaticité)としている⁴²。つまり、バルトの二項対立には必ずしも対立関係あるいは優劣関係にある二つの概念が置かれているのではなく、文書においてただ入れ替わることができるようなパラディグム(範列)の関係にある二つの項がおかれているのだとビュファは指摘する。バルトの二項対立がなぜこうしたパラディグム性を持つのかについて、ビュファはまずバルトの文章における動詞ではなく名詞の優位、文ではなく語の優位を上げる。言い換えるなら、シntagム(連辞)ではなくパラディグムの方への好みがあるということだ。もう一つの理由は、バルトの二項対立の二つの項の関係は「AはBではない」といった単なる否定によるものでしかないことが指摘されている。例えばビュファは「パロールはエクリチュールではない」という例をとり、この二項がどのように対立しているかバルトは何も教えてくれないとする。つまり、パロールとエクリチュールそれぞれの語の定義をすることはできても、その両者は単に異なるものであるにすぎず、その対立関係の内実をバルトは説明していないというのである。したがってバルト的二項対立は極端に言えば「S/Z」というタイトルが示すような空虚なふたつの語の並置関係でしかない。こうしたバルト的二項対立に加えて、先ほど挙げたような「男らしい／男らしくない」といった二者択一を迫られるような反対概念があるわけで、この二種類の二項対立の存在がバルトの二項対立に対する態度を矛盾するものになっているのだ。実際にバルト自身が用いた二項対立を考えてみると、その多くは真の対立関係を示さないような単なるパラディグム的關係の二つの語であると言えるかもしれない。言語学・記号学の一連の用語群はみな全く対立関係を示すようなものではないし、それ以外の例えば「快楽／悦楽」(le plaisir / la jouissance)や「ストウディウム／プンクトウム」(le studium / le punctum)といった二項対立も同様である。

バルト的二項対立をもっともよく示しているのは「ドクサ／パラドクサ」(doxa / paradoxa)の二項の関係だろう。「世論、多数派の精神、プチ・ブルのコンセンサス、自然の声、先入観の暴力⁴³」であるドクサをいかに崩すか

⁴² Voir Marc Buffat, *op.cit.*, pp.29-32.

⁴³ Roland Barthes par Roland Barthes, 1975, O.C., t.III, p.130.

ということがバルトの終生の関心事であったが、それを崩すためにバルトはドクサを激しく攻撃するのではなく、一つのパラドクサを持ちだしてくる。

ある一つのドクサ（一つの通念）が提示され、それが耐えがたいものであれば、そこから身を離すために一つのパラドクサを要請する。それから、このパラドクサがねばついてきて、それ自身が新たな凝固物、つまり新たなドクサとなる。すると私は新たなパラドクサを求めてより遠くへと向かわなくてはならない⁴⁴。

この時のパラドクサはドクサに対立するものではない。パラディグムにおいてと同様、接頭語 *para-* が持つ「～の傍らに」、「～のそばに」という意味に目を向けなくてはならない。あるドクサの「傍らに」に何か新しいものを置き、それによってドクサから「身を離す」。そこには暴力性や攻撃性は無く、ただそっと身をかわすという運動が残るだけである。言い換えるなら、パラドクサを置くということは、そこに動きやずれを生じさせることで、自明とされている考えを崩すことなのだ。バルトの思考法の根本にあるこうした非暴力性は彼の政治に対する態度に表れているといえるだろう。『神話作用』などの著作において日常の些細な事象に視線をやり、そこで作用しているプチブル・イデオロギー＝ドクサの告発を行なう一方で、バルトは現実の政治に対してはほとんど関心を抱かなかった。正確に言えば、現実の政治に対しては専ら不信感を表明するだけであった。こうした彼の政治的スタンスについてモーリス・パンゲは以下のように述べている。

1968年に吹き荒れたような異議申し立ては、彼には国家権力の隠れた共犯者のように思われた。国家権力とは真正面から挑発されれば、いつも自分を強固にしてしまうものだ。彼は政治においては間接的戦略をとることを強く薦めていた。間接的戦略とは、権力に対する断固とした不信感の表明と権力を遠ざけることの実践によって、権力をやせ細らせ、弱体化させることである⁴⁵。

⁴⁴ *Ibid.*, p.149. この断章のタイトルは「ドクサ／パラドクサ」と名づけられているが文章中では「パラドクス」という言葉が用いられている。ここではこの二項の関係をより明確にするため、みずず書房から刊行されている邦訳にならって「パラドクサ」と訳出しておいた。ロラン・バルト、『彼自身によるロラン・バルト』、佐藤信夫訳、みずず書房、1979、p.99.

⁴⁵ Maurice Pinguet, « Aspects de Roland Barthes », inédit. 邦訳は『テキストとしての日本』、竹内信夫／田村毅／工藤庸子訳、筑摩書房、1987に「バルト諸相」として所収されているが、東京大学・中地義和教授の御厚意によりフランス語原版を参照することができた。

バルト的二項対立は「真正面から」の異議申し立てによって生じる戦闘の硬直化を避け、極論を避けずに言えば、「正一反一合のような通俗化したヘーゲルの弁証法の暴力からすつと身をかまし、政治的権力の裏をかくという政治性・倫理性を帯びた概念なのだ。そして強調しておかなくてはならないのは、パラドクサがドクサに変容しそうになると——これは社会の運命である——、すぐにまた新たなパラドクサを目指して遠くに向かい、この運動が永遠に続けられていくということだ。つまりこのことは、永遠にバルトに書くことを保障するのである。

では、バルトはいかにしてこのようなパラダイグムの関係でしかない非攻撃的な二項対立を用いて、二つの主体、二つの言語活動の境界線での思考を形にしていったのか。例えば一つの二項対立のみを主題として書かれた『テキストの快楽』（1973）を見てみよう。バルトは二番目の断章において快楽と悦楽という言葉を用いるや否や、

快楽／悦楽。用語に関して未だぐらつきがある。私も間違え、混乱する。いずれにせよいつまでも曖昧な部分は残るだろう。使い分けたとしても、確実な分類を行なったことにはならない。パラダイグムは軋むだろう。意味はすぐに取り消されたり、取り替えられたりするだろう。ディスクールは不完全なものとなるだろう⁴⁶。

と述べ、最初からこの二項対立が不確定なものであることを告げる。その後、少しずつ快楽と悦楽の性質が明らかになるにつれて、両者の相違点も明らかになっていく。前者はどうやら満足、充実、快感を与え、文化と密接な関係を持っているものだということがわかり、逆に悦楽というのは忘我、揺さぶり、危機といった快楽をゆるがすものだということがわかり始める。二項対立がおぼろげな形で姿を現しはじめた途端、突然テキストは以下のように告げる。

テキストの快楽、快楽のテキスト。これらの表現は曖昧だ。快楽（満足）と悦楽（失神）とを同時に包み込むようなフランス語がないからだ。「快楽」は、だから本書においては（予告はできないが）、ある時は悦楽と重なり、ある時は対立する。しかし、私はこの曖昧さを利用しなくてはならない⁴⁷。

この二項対立は決して一つの明確な形を示そうとはしない。それは常に震え、

⁴⁶ *Le Plaisir du texte*, 1973, O.C., t.II, p. 1495.

⁴⁷ *Ibid.*, p.1503.

軋んでいるだけだ。ここまで見てわかるように、「快樂／悦樂」という二項対立はフィクションである。確かに「快樂」なり「悦樂」なりというのは一つずつとれば精神分析などの理論に頼って定義することができるであろう。しかし、この両者の間にスラッシュ（「/」）が入れられ、この二つの言葉がなんらかの関係、交流を持たなくてはならなくなった瞬間、両者は差異と共通点を求め合って動き始める。すでに見たようにバルト的二項対立とは単なるパラダイグムの関係にある二つの項であって、真の対立関係にあるものではない、あまり関係のない二つのものの並列にすぎないのだ。しかし、あたかもそうした二項の対立関係が存在しているかのように振舞うことで『テキストの快樂』というテキストが始動するのであり、そしてこのテキストの存続を辛うじて支えることになるのだ。快樂と悦樂という概念はそれぞれの領域を確定するために何度も境界線を引きなおされるが、それでも決して確定することはない。そしてこの境界線の確定不能性だけが「私」に書くことを続けさせるのだ（「私はこの曖昧さを利用しなくてはならない」）。

『明るい部屋』においても事情は同じである。あの「ストゥディウム／プンクトゥム」を概念装置のようなものとして捉え、それをを用いて写真を分析したところで我々に一体何が残るだろうか。ストゥディウムは文化に属しコード化されており、プンクトゥムは名づけがたい「手に負えないもの」（l'intraitable）であるという対立はあつという間に意味をなさなくなる。というのも、プンクトゥムは思いのほか早く名指され（「その後、真のプンクトゥムは彼女が首にかけている短い首飾りだということを理解した。というのも（おそらく）、私がいつも目にしていた自分の家族の一員の首にかかっていたものが、これと同じ首飾り（金鎖の細い組みひも）だったからだ⁴⁸」）、もう一つ別のプンクトゥム——第2部での「時間」というプンクトゥム——が登場するからだ。もっとも大事なのは「私」が「ストゥディウム／プンクトゥム」というあたかも対立関係にあるような二項対立を用いて、写真の本質を求める物語を語り始められるということだ。最初の8つの断章で写真を考察することの難しさを語った後、「私はグラビア雑誌をめくっていた⁴⁹」という小説的な一文からこの物語ははじまる。フィクションとしての二項対立は同時にフィクションを始動するための装置でもある。一つの二項対立を提示し、あたかもそうしたものがあるかのように振舞って、それについて何かを書き始めるが、その二項は対立関係に無いがためにやがて物語はずれや軋

⁴⁸ *La Chamber claire*, 1980, O.C., t.III, p.1144.

⁴⁹ *Ibid.*, p.1122.

みを生じてしまう。すると今度はこのずれや軋みを直して二項対立をきちんと定めようとして話が進むが、ずれや軋みは決して止むことが無い。

ジンテーゼはごまかされ、裏をかかれる。そこでは、知は破壊されるのではなく、ずらされるのだ。知の新しい位置は——ニーチェの言葉によれば——フィクションの位置だ⁵⁰。

すでに示したことだが、このようなずれは『モードの体系』のような本でも起こっている。バルトはまず書かれたモードを分析するにあたり現実の衣服のコード、書かれた衣服のコード、レトリックの体系の三つのカテゴリーを保持して分析を進めていたのだが、レトリック、すなわち書かれた衣服がもつコンテクションの体系の分析にあたって、前二者に対して行なった言語学をモデルとした形式主義的分析はもはや通用しなくなり、分析者はいくばくかのフィクションをそこに持ち込まざるをえなくなるのだ。

バルトのディスクールが持つフィクション性、つまりずれを処女作である『零度のエクリチュール』においてすでに見抜いていたのはアラン・ロブ＝グリエだ。ロブ＝グリエは1977年にスリジー＝ラ＝サルで行なわれたバルトをめぐるシンポジウムでバルトを前にして以下のように述べた。

私を夢中にさせたバルトの初期のテキスト以来、つまり私が今でもまだ語ることができるであろう『零度のエクリチュール』の冒頭部ということですが、私はその地滑りに気づきました。[...] 最初、堅固な何かからはじまります。「周知のように、ラングとは一般にある時代のすべての作家に共通したきまりと習慣の肉体なのである」(これは明白であって、そのとおりなのです)。それからただちに、それは地滑りを始めるのです。「それは、以下のようなことを引き起こす。つまりラングは作家のパロールを完全に横切るが、しかし形式というものをその作家にもたらすことはなく、それを養うこともない自然として存在する」。ここにはすでに一種の詐欺があります。というのも実際にはまったくそんなことはありえないからです。地滑りしたのは一つの思考であり、その思考はそのように隠喩から隠喩へと地滑りを続けてゆくことになります。その結果、わずか1ページで我々は足を踏みしめることができず、足場を失ってしまうのです⁵¹。

ここでは『零度のエクリチュール』の「ラング／パロール」の二項対立が問

⁵⁰ « Le sorties du texte », 1973, O.C., t.II, p.1617.

⁵¹ *Prétexte : Roland Barthes Cerisy 1977* (sous la direction d'Antoine Compagnon), Christian Bourgeois Éditeur, 2003, p.285.

題となっている。「ラング／パロール」は当然対立関係にはないのだが、この両者の関係を定義づけしようとするバルトはここで「地滑り」を引き起こす。ラングが習慣的なものである以上、それは作家が知らないうちに作家のパロール（語り）を規定するものであり、作家のパロールに慣習的な形式を押し付けようとするはずである。こうした二項対立の虚構性が、バルトのテキストにずれあるいは地滑りを引き起こしているのだ。

ここまで来ると、なぜ二つの主体、二つの言語活動の境界で思考し続けたバルトが二項対立を好んだのかが明確になるだろう。まず、分析の人バルトが実際には対立関係にないフィクションとしての二項対立をあえて使用する。それによって物を考えられ、分析し、書くことができるからだ（「これらの対立 (oppositions) はしばしば、邪魔なものを取り払い、より遠くへすすむことを可能にするのです。つまり、単に語り、書くことを可能にしてくれるのです⁵²」）。しかし、そこで用いられている二項対立は当然ずれはじめ、創造の人バルトが、こうしたずれと戯れることで筆を進めていく。そしてまたそのずれをきちんと止めようとする分析の人が二項対立を確定しようとするが、またその二項対立はずれ始める。こうした絶えざる往復運動、あるいは絶えざる侵犯の遊戯によってテキストは織りなされていくことになる。バルト的二項対立は、定まろうとするが決して定まらない彼の境界線の思考を始動するための役割を果たすばかりでなく、その絶えざる運動を再形式化しようとする役割をも担っているのだ。

結論

我々はこの短い論考で、バルトの中で二人の異なる相容れない主体が、弁証法的な運動を示しながら調和的統合を目指すことも、お互いを抹消しあうこともなく、ただせめぎ合いながら両者の境界線を絶えずずらしていく様子を示し、バルトが常にそうした境界線において思考し、物を書き続けてきたであろうことを確認した。これによって、確かに60年代と70年代の間には書き方や思想において変化があるにせよ、クロノロジックな視点から見た批評家バルトから作家バルトへ、あるいは体系主義者バルトから快樂主義者バルトへという安易な変貌説に異議申し立てをすることができると思われる。さらに、バルトが愛した二項対立が「左／右」のようないわゆる対立関係を

⁵² « Vingt mots-clés pour Roland Barthes », 1975, O.C., t.III, pp.315-316.

示すものではなく、単なるパラダイグムの関係を示すのだということを確認し、そうした二項対立がなぜバルト的な境界線の思考に適しているのかを示してきた。二項の間に引かれたスラッシュ（「/」）は確かに二項の境界線として振舞うが、その境界線は絶えず侵犯（transgressor）され、侵犯される度に引きなおされる。この侵犯の遊戯こそがバルトに快樂を与えるのだ。この論考で、言語学や記号学から借りてきた二項対立が多用されている 60 年代のテキストの中にすら、バルト的侵犯を見出せる可能性が提示できたように思われる。バルトが提示する二項対立は、理論化のための概念装置という役割を担っているのではなく、むしろ書くという行為を作動しそれを維持させるための一つの装置なのであり、そうである以上、我々は無邪気にバルトの提示した二項対立をなんらかの分析道具として用いることはできないのだ。